

バラエティ番組 ～過去と現在と未来～

犬飼 **

**** INUKAI

中京大学現代社会学部現代社会学科

学籍番号 C11****

1. はじめに：研究主題（私の関心）

私は幼い頃からテレビと接してきた。本を読むことよりも、テレビ（映像）を観ることが好きだった。テレビ番組といえど、その種類は数多くある。ニュース（報道）、ドラマ、バラエティ、スポーツ…。その中でも、特に「バラエティ番組」は友達との会話のネタにもなっていた。そして、家族や親戚、友人など性別や年齢を問わずバラエティ番組の内容について話すことができた。そこで、「何故、バラエティ番組は性別や年齢を問わずその内容について話すことができるのか?」また「現在のバラエティ番組のあり方はどのようなものなのか?」など、バラエティ番組について詳しく知りたいと思い、番組の構成・種類（例：トーク系・お笑い系など）、視聴率・視聴者の年齢層・種類（ファン・一般など）の項目で研究を進めることにした。

2. バラエティ番組の概要と歴史

バラエティ番組を研究するにあたり、「バラエティ番組とは何か?」を調べる必要がある。バラエティ番組とは、歌・コント・コメディ・視聴者参加型の企画などのいくつかの種類の娯楽を組み合わせたテレビ・ラジオ番組のことである。（ウィキペディア参照）

バラエティ番組の歴史を次のようにまとめてみた。

1956年バラエティ番組と呼べる番組形態が登場。約15年間続いた『ジェスチャー』（NHK）、約6年間続いた視聴者参加型番組『何でもやりますショー』（日本テレビ）がスタート。また、バラエティドラマ『お笑い三人組』（NHK）、脱線トリオを生み出した『お笑い演芸』（日本テレビ）もこの年にスタートした。

それ以前は、1954年にクイズ番組が誕生。『親子クイズ番組』（NHK）『シルエットクイズ』（日本テレビ）がある。また、音楽と笑いを融合した最初のバラエティ番組『二人でお茶を』（日本テレビ）もこの年にスタートした。

1958年には、VTRが登場し、収録が可能となり、テレビの表現力が飛躍的に高まった。（例：テレビドラマ『私は貝になりたい』）

1959年には、ニュース・コント番組『おとなの漫画』、インタビュー番組『スターキー夜』（フジテレビ）『メイコのごめんあそばせ』（テレビ朝日）がスタート。インタビュー番組『スターキー夜』『メイコのごめんあそばせ』はトークバラエティのはしりとなった。

1961年4月に『夢で逢いましょう』（NHK）、6月には伝説の歌謡バラエティショー『シャボン玉ホリデー』（日本テレビ）がスタートし、音楽と笑いの融合によるバラエティ番組のひとつの完成形ができた。

1963年6月『大正テレビ寄席』（テレビ朝日）がスタート。15年間放送された新しい笑いを取り入れた番組であり、ザ・ドリフターズなどが注目されるきっかけとなった。

1965年4月『アベック歌合戦』（日本テレビ）『ちびっこのどじまん』（フジテレビ）『踊って歌って大合戦』（日本テレビ）がスタート。この年は視聴者参加型番組がたくさん繰り出され、『アベック歌合戦』などは単純趣向のばか騒ぎ番組で、高視聴率をものにし、公開収録の会場は常に大混乱という人気ぶりを博した。これらの番組は「白痴番組の横綱」の異名をとり、マスコミや良識ある市民の批判が強くなり、翌年打ち切りに。このようになった背景には、この時代、視聴者のテレビに向けられた視線が熱かったことがある。この他に白痴番組のレッテルを貼られた番組は1963年6月スタートの『底ぬけ脱線ゲーム』（日本テレビ）である。この番組は、タレント、俳優、歌手、スポーツ選手などが出演し、視聴率は20%をキープ。約10年間続く長寿番組となった。

また、1966年には『笑点』（日本テレビ）、1967年にはコント+音楽に加え、社会風刺を効かせた内容の『ドリフターズドン!』（TBS）、1969年にはギャグの洪水というにふさわしいショートコントの連発で視聴率25%超えをした『巨泉×前武ゲバゲバ90分!』（日本テレビ）がスタート。この番組は台本の作成からセットの組み立てまであまりにも手間がかかり、わずか半年で終了。つくり込んだ笑いで勝負するという点で、きわめて意欲的なバラエティ番組だったが、レギュラー番組においてつくり込みの度合いを計ることの難しさを示した番組でもあった。

また、1969年には『8時だよ!全員集合』（TBS）がスタート。土曜の夜8時枠で、視聴率が放送開始直後から上昇、ほどなくして40%を超える異常事態となる。楽器を捨てたギャグコントの

みで勝負した番組である。同時刻の枠には『コント 55 号の世界は笑う』（フジテレビ）が放送され、30%以上の視聴率を出していたが、1970年3月に打ち切りに追い込まれた。どちらの番組も高視聴率を獲得していたにもかかわらず、何故『8時だよ！全員集合』は打ち切りにならなかったのか。それは、当時のトップクラスの構成作家、演出家が総出で番組を作り、ザ・ドリフターズが実演しながら、さらに練りこんでいき、毎回当初の台本は原形をとどめないほどに改変されたという。また、リハーサルのきつさも相当なものであり、『ゲバゲバ90分』とは別な意味でつくりこんだ笑いを貫いた。そして、この番組は低俗番組のレッテルを貼られながらも、子供たちの絶大な支援を受け、高視聴率を維持した。その後、1977年『ドリフ大爆笑』（フジテレビ）がスタート。ザ・ドリフターズは1970年代のお笑いバラエティ番組において押しも押されもしない主役を演じた。

人気番組が登場する中、1971年以降演芸は低迷期を迎えた。その背景には、演劇分野には見るべきものがほとんどなかった。そして、第1期漫才ブームのスターたちの人気に陰りが見え始め、視聴率のとれない冬の時代に。だが、ザ・ドリフターズの『8時だよ！全員集合』の快進撃だけは目を引いていた。

1975年『欽ちゃんのドンとやってみよう!』（フジテレビ）がスタート。

演芸の低迷期を打開しようと、当時制作子会社のディレクターだった佐藤良和氏は打ち合わせのために出演者の芸を見に演芸場に通った。漫才の場合、演芸場で15~20分でやっているネタをテレビでは7分に縮めなければならず、再構成が必要である。また、この演芸場通いにより、ベテランの芸人ではこれからの笑いをつくっていくという役割を担うことができないと佐藤氏は判断。それと同時に新しい才能も育っていることを知った。そこで、佐藤氏は「新しい笑いを育てるためには、斬新な演出が必要なのだろう」という仮説を立てた。そして、新しい芸人たちをメジャーな芸人に育てるためには、それ相応の演出が必要である。それ相応の演出とは、既存の番組の中で様々な実験を行うことである。（例：『お茶の間スペシャル』の中での「東西人気寄席」という企画を立て、寄席を大学の落語研究会のメンバーで埋めるというもの。その理由は、落語研究会のメンバーなら、笑いの感受性も鋭く、斬新さを理解する能力をもっているからである。収録本番を迎え、大御所芸人たちは、落語研究会の学生たちを前にして、勝手の違いに焦りを見せた。学生は面白いネタには敏感に反応、つまらなければ完全に引いてしまい、全く反応しない。）この実験で顔なじみであるとか、有名であるとかといったことで甘えさせてはくれない厳しさがああり、受けなければ、次のネタを繰り出していくしかないから、しゃべりは自然とスピーディなものとなることが判明。佐藤氏は新しい笑いが作れるかもしれないという可能性を感じ

た。(1)

3. 有名番組『THE MANZAI』の誕生

佐藤氏が初のゴールデン枠で、東西漫才対決といったコンセプトの特別番組の演出を依頼されたことから始まる。失敗したら二度と手に入らないビッグチャンスで無鉄砲な博打を打つわけにはいかない。そのため、入念な準備をして、成功の可能性を少しでも高めていく工夫をする必要があった。その工夫とは、①出演者が実力以上の仕事をしてくれる環境を設定する必要性、②「番組のタイトル」（演芸色のないものが望ましいが、番組表を見て、何の番組かわからないのでは誰もチャンネルを合わせてくれない）、③スタジオには若者だけしか入れないというルール（出演者と同世代か、それ以下の世代。演芸場には絶対に行かない若い女性にも観客席にいなければならない。）、④スタジオ内の雰囲気（番組のタイトル、出演者の顔ぶれ、観客のテイストに合わせてこれまでとはまったく異なったものにしなければならない。）である。この工夫は、演芸番組としては初ものづくしである。＝「革命を起こす」（戦士は若手お笑い芸人たちで予想外以上の仕事をしてもらうことで、革命の成功確率は高まる。）

また、出演者には星セント・ルイス、ツービート、横山やすし・きよし、中田カウス・ポタン、ザ・ぼんち、紳助・竜介、B&B が名を連ね、ベテランはベテランなり、若手は若手なりにやる気は十分である。だが、漫才合戦といった企画は、さまざまなテレビ局がすでに企画していたため、特別番組枠の舞台に大した期待はしていなかった。出演者はスタジオを眺めた瞬間、表情を変えた。ファッションブルで跳ねたようなセットと客席にいる若い観客を見て、目の色を変えた。

「この番組はちょっと違う」と誰もが思い、何らかの可能性を感じていた。それは、出演者がステージに上がると一目散にわかるのである。どのコンビも、いつも以上のスピードで疾走し、機関銃のようにギャグを連発し、息もつかせぬ迫力にあふれていた。観客席の若い観衆はハイテンポなネタにしっかりついてきてくれて、そのうえ笑わせたいポイントで笑ってくれるため、出演者たちは打てば響く快感を味わっていた。しかも、観客の中にかわいい女の子もいるのだから、張り合いがいつもと違うのだ。

また、撮影の仕方（カメラアングル）にもひねりを入れた。通常の演芸番組では、カメラは正面の引きとアップだが、背後や左右などのさまざまなアングルから変化のある映像を撮り、ドキュメンタリー性を強調。これまでの演芸番組のカメラワークは躍動感とは無縁なもので、斬新なカメラワークは、見る側へのインパクトだけではなく、演じる側へのインパクトも大きくさせる。

そして、スピーディーさを強調するために、冗漫はすべてカットするなど、編集にもかなり手

間をかけ、アップテンポなノリをさらに強調させた。

『THE MANZAI 翔べ! 笑いの黙示録東西激突! 残酷! ツッパリ! ナンセンス』と銘打った第1回放送は、視聴率15.3%という高視聴率を獲得した。そして、『THE MANZAI』は足かけ3年にわたり、合計11回の番組が制作、放送された。第5回の放送では東京で38%、関西で40%を超えるという驚異的な視聴率を獲得。この高視聴率を獲得できたのも、『THE MANZAI』の支持者が圧倒的に若い世代だったためである。

だが、この頃の若い世代はこれまでのテレビに飽きていた。この時代、若者のテレビ離れはマスコミでも“異変”と報じられていた。世はディスコ全盛期、ゲームセンターには夢中になれるゲームが並び、テレビより楽しいものが巷に溢れていた。テレビは、時代を映す鏡として30年近い歴史を築いてきたが、少し飛び跳ねなければならない曲がり角に来たのだろう。これは、現代の若い世代がテレビ離れする要因に通ずるものがあるのではないだろうか。なぜなら、現在の若者はテレビに観たい番組が無く、ネットやゲームを娯楽としているからだ。若者のテレビ離れについては後で改めて述べることとする。(2)

4. お昼のバラエティショー『笑っていいとも!』の誕生

1980年当時、平日の12時~13時のお昼枠は、ワイドショーやクイズ番組が多かった。そこで、佐藤氏たちはバラエティ番組をその枠に持つことにした。それが、後の『笑っていいとも!』に繋がることとなる。

1980年10月1日、新宿東口にできたてほやほやのスタジオアルタからの公開生放送バラエティ『笑ってる場合ですよ!』がスタート。この番組は『THE MANZAI』のファンを中心に若年層から視聴率を稼ぐことに成功。この成功の要因のひとつに、主婦層をターゲットから外した点にあった。また、高視聴率を支えたのは昼のテレビなど見ないはずの大学生とOL、水商売の女性たちだった。そして、舞台が真新しいスタジオアルタであったことも番組に新鮮味を加え、『笑ってる場合ですよ!』の人気により、スタジオアルタ=若者の広場というイメージが定着。

また、この番組で明石家さんまが東京でレギュラーデビューを飾り、『笑ってる場合ですよ!』と『オレたちひょうきん族』により、押しも押されもしない全国区のスタータレントとして成長。

1982年10月『笑ってる場合ですよ!』が終了。後番組として『森田一義アワー 笑っていいとも!』がスタート。『笑ってる場合ですよ!』の終了背景には、日替りでの構成がきつく、1年半経過する頃には番組の人気とは裏腹に制作側、出演者側にも疲労の色が見えはじめ、マンネリ化に陥りやすくなってきたことが挙げられる。

また、生放送には生放送ならではの意外性やハプニングがありそうだが、お膳立てのしっかりとしない環境のハプニングでは単に視聴者をしらせさせることになりやすく、結果的に予定調和でパターン化されたギャグで逃げようとする傾向が出てくる。このような状況を番組のテコ入れで打開することは難しい。

だが、番組の人気はあり、中学生や高校生が学校を無断欠席してスタジオアルタに来るという問題が多数発生した。だが、彼らはネタを見に来るわけではなく、ただタレントを見に来ている。そのため、スタジオの雰囲気も変わってしまう。そして、当時は先着順で観覧客を入れたいため、学生の無断欠席がささやかな社会問題へと発展。これを契機に、観覧客の入れ方を改め、現在は18歳以上の方限定でかつ葉書での応募のみとなっている。

また、番組司会者にタモリ（森田一義）を起用。彼のインテリジェンス溢れる個性的な芸風にスタッフも好感を持っていた。だが、反発も多かった。その当時、深夜放送のパーソナリティであったタモリにはサングラス姿とともに、毒のある深夜の顔というイメージがあり、昼間の顔としては全く不適格だという批判があった。そして、タモリ自身、企画に乗り気ではなく、昼夜の逆転、毎日出演し続けることによりプライベートを喪失するという思いがあった。だが、次の時代の笑いを築く旗手として、タモリは適格であると佐藤氏は感じていたと同時に、視聴率の不安もあった。

10月4日、『森田一義アワー 笑っていいとも!』がスタート。タモリの夜のイメージを払拭するために髪型は七三分け、サングラスの色は薄めにし、洋服もアイビールックにした。タモリ自身も違和感があり、“どうせ3ヶ月で終わる番組なんだからいいか”と自分に言い聞かせていたそうだ。初回の関東地区での視聴率は4.5%と低視聴率。番組の柱と考え、期待していた「ふんいき劇場『タモリ+1』」は観客受けの悪いコーナーだった。それとは逆に、添え物として用意していた「テレフォンショッキング」は意外な展開に。もともとはゲストに登場してもらい5分ほど話してもらおうコーナーだったが、1ヶ月を過ぎた頃から「出演おめでとう」の花輪、祝電まで届くようになった。リレー形式で毎日登場するタレントは人気アイドルから大スターまでさまざま、タモリとの会話で意外な素顔を見せてくれたりする。だが、当初は出演拒否が多く、俳優や歌手は皆「お笑いバラエティ番組はイメージが悪くなるから嫌だ」といって敬遠。歌手の場合は「新曲を歌わせてくれれば出演する」というので、番組スタート時はゲスト歌手に歌ってもらっている時期もあった。また、次の日に誰が出てくるかわからない意外性とタモリが醸し出すホンネ感が魅力となって、視聴率が上昇し、いまや『笑っていいとも!』の名物コーナーに。

2012年3月頃までは、本日出演しているゲストが翌日登場するゲストを紹介するという形式で

あったが、現在（2012年4月以降）は翌日のゲストはゲストが決めるのではなく、番組側が決めており、明日来ることが可能かの確認は電話で行う。その中で、ゲスト同士が初めて電話越しに話するというケースもある。

そして、視聴率は半年もすると20%を伺うまでになり、祝日には25%を超える数字も出始めた。『笑っていいとも!』の人气が高まっていく中、スタジオアルタの狭さの貢献度にも気づく。観客を隣の人と接触するほど詰め込み、ステージのすぐ前まで観客がいる。人が笑うと、その振動が伝わって笑いが伝染する。観客はステージ上のタレントたちと同様の参画感を味わいながら楽しむことができる。これは、現在のバラエティ番組にも通ずる。ゆえに、現在のバラエティ番組の大半が観客を入れての収録であり、番組によっては観覧客がテレビ画面に映ることもある。

（例：VS 嵐、嵐にしやがれなど）

また、生放送のバラエティ番組には怖さと魅力がある。例えば、某作家が「テレフォンショッキング」に登場したとき、話が盛り上がりすぎて他のコーナーは全部飛んでしまったこと。ゲストが遅刻して、番組を組み替えることも。そんな中、制作側は番組をきっちり作ろうとするのではなく、生放送のアクシデント的な面白みを演出する体制に切り替えていった。

さらに、『オレたちひょうきん族』でも用いられたNGや楽屋オチの露出は番組にリアル感やホンネ感を付加し、毎回見てないと仲間の話題に取り残されるという緊張感を視聴者に醸成する。後に、これは『笑っていいとも!』の商品価値のひとつとなっている。

『笑っていいとも!』は中身に変化をもたしつつも、およそ30年という長い間続く長寿番組となった。(3)

5. 音楽番組の誕生

1985年10月『冗談画報』（フジテレビ）がスタート。この番組は、お笑いタレントからミュージシャン、演劇人など様々なジャンルのアーティストがパフォーマンスするライブスタイルで構成され、1998年まで続いた。その後、『冗談画報II』と名を改め、1990年9月まで続いた。出演したお笑い芸人、ミュージシャンは皆キャラクターの立つ芸者たちで、毎回視聴者を楽しませていた。

『冗談画報』が開始した翌年の10月24日『MUSIC STATION』（テレビ朝日）がスタート。この番組は、日曜日の昼の時間帯に放送されていた『歌謡ドッキリ大放送』に代わり、金曜日20時台に新設された音楽番組。当初は『歌謡ドッキリ大放送』の司会者であった関口宏が司会者を担当していたが、1987年3月27日で降板。後任にタモリがテコ入れのため2代目司会者として

就任。

番組開始当初は若年層向けの J-POP アーティスト系・アイドル系から中高年向けの演歌歌手まで出演する「ファミリー層」を対象としたが、1988 年頃から演歌歌手の出演が減少、J-POP アーティスト系が数多く出演するようになった。

また、『ザ・ベストテン』（TBS）や『夜のヒットスタジオ』（フジテレビ）といった名物番組が次々と終了、「歌番組冬の時代」と呼ばれた 1994 年頃まで視聴率はほとんど一桁台の横ばい状態に。1995 年からは完全に「J-POP」「アイドル」に絞り、ターゲットを若年層とした。(4)

そして、『HEY!HEY!HEY!MUSIC CHAMP』（フジテレビ・1994 年 10 月 17 日～2012 年 12 月 17 日）や『うたばん』（TBS・1996 年 10 月 16 日～2010 年 3 月）といったニュータイプの音楽番組がスタートした。

だが、近年音楽番組の終了があとを絶たない。『うたばん』は 2010 年 3 月で終了。その後『ザ・ミュージックアワー』と番組名を改めたが、視聴率がいまひとつ伸びず 2010 年 9 月に終了。『HEY!HEY!HEY!MUSIC CHAMP』は 2012 年 12 月 17 日に終了。

それと同時に、新しい歌番組も誕生している。それには、『1 番ソング SHOW』（日本テレビ）や『火曜曲』（TBS）があり、また『COWNT DOWN TV』（TBS）や『ハッピーMUSIC』（日本テレビ）など深夜帯にも歌番組は存在するが、歌番組自体は再び「冬の時代」を迎えているのではないだろうか。その要因として、若者のテレビ離れ、CD を売る宣伝のために放送されている歌番組を見る人が減少傾向にあること、音楽は CD を買わずにダウンロードする時代への変化が挙げられる。また、毎回同じコーナーの繰り返し、同じ流れでの放送では視聴者も飽きるだろう。

6. メディアミックス化するバラエティ番組

メディアミックスとは最近は一般的に、元々一つのメディアでしか表現されていなかった作品（原作）を、小説、漫画、アニメ、ゲーム（コンピュータゲーム）、音楽 CD、テレビドラマ、映画、タレント、トレーディングカード、プラモデルなど、複数メディアを通じて展開するビジネスモデルのことである。（Wikipedia 参照）

バラエティ番組でメディアミックスが初めて行われたのは、1994 年放送開始の『ウッチャンナンチャンのやるならやらねば!』（フジテレビ）内での人気コーナー「ナン魔くん」のキャラクターのマモーとミモーによる「マモー・ミモー野望のテーマ」の CD 化、「ナン魔くん」と「やるやらクエスト」は子供向け漫画雑誌『コミックボンボン』（講談社）で漫画化された。これがバラエティ番組におけるメディアミックスのはしりとなった。(5)

近年、記憶に新しいバラエティ番組におけるメディアミックスは、『笑う犬の冒険』（フジテレビ）の「はっぱ隊」（メンバーはウッチャンナンチャンの南原清隆をリーダーとし、ビビる（大内登・大木淳）・ネプチューン（名倉潤・堀内健・原田泰造））の6人であった。「YATTA!YATTA（やった!やった!）」という掛け声とともに独特のダンスをする。素っ裸（実際は肌色のパンツを着用）で股間に葉っぱ一枚の格好がトレードマーク。また、『ノブナガ』（CBC）の「GO★T0（ゴー・トゥー）」（フットボールアワーの後藤輝基が歌唱力とギターの技術に自信があり、音楽デビューしてみたいと語っていたところから始まった企画であり、ソロで歌手デビューを果たす。）のCD化がある。

また、『24時間テレビ 愛は地球を救う』（日本テレビ）のチャリティーグッズや番組・映画とのコラボグッズ、ドラマやバラエティ番組のDVD化、近年ではTwitterと関連し番組放送中にTwitterに寄せられたメッセージを流すなどもメディアミックスによりもたらされた商品や企画ではないだろうか。

7. コメディアン化するアイドル

いまや、SMAP、嵐、AKB48といったアイドルたちがバラエティの世界に進出し、自らのグループ名がタイトルにつくバラエティの冠番組を持っている。その足掛けとなったのがSMAPである。

SMAPがバラエティ番組に進出する以前にも『8時だヨ!全員集合』などでアイドルタレントはバラエティ番組に出演していた。アイドルタレントは、番組を華やかにしてくれる非常に貴重な存在であり、人気もある為視聴率に貢献してくれるというメリットがある。一方で、番組はアイドルの人気に引っ張られ、視聴者層もそのファンで占められてしまうというデメリットを持つ。現在のアイドル（特に、ジャニーズやAKB48）が出演するバラエティ番組には、このデメリットは付き物であるだろう。

1990年佐藤氏はジャニーズ事務所の社長から「SMAPを平成のクレイジーキャッツにしたいので、笑いを教えてほしい」という依頼された。当時のSMAPはまだCDデビューをしておらず、また圧倒的な才能を持ち合わせてはいないが、多くのファンがついていた。その依頼された背景に、時はJ-POP時代に突入し、歌謡番組が絶滅寸前の状況下であり、アイドルたちは歌の発表の場を失い、いわゆる「アイドル難民」が大量発生したことがある。

1991年10月『夢がMORIMORI』（フジテレビ）がスタート。番組開始前には番組スタッフがSMAPに寄席や落語を見せに行ったり、漫才の研究をさせたりし、番組内でも女装させたり、コントを演じさせながらお笑いの世界を学ばせた。『夢がMORIMORI』と並行して、1995年4月から

半年間に渡り『SMAP のがんばりましょう』（フジテレビ）がスタート。深夜帯（24 時台）の 10 分番組であり、毎週月～金曜日で日替わりでコーナーが変わるものであり、構成にはかなり凝って作られた。この番組で SMAP は喜劇とお笑いを実際にやりながら学んだのである。近年デビューしたアイドルでここまで笑いについて学んだ者はいないだろう。

そして、この 2 番組で SMAP はコメディアンとしての才能を開花し、1995 年 9 月に両番組が終了。半年の準備期間を経て、1996 年 4 月『SMAP×SMAP』（フジテレビ）がスタートし、のちの超人気バラエティ番組が誕生する。そして、SMAP はいまや知らない人はいないくらい、全世代が知る国民的スターとなった。(6)

8. バラエティ番組の種類

バラエティ番組には、いくつかの種類がある。私（研究者）は、次のとおりに分類した。

- 『暴露トーク型』（例：しゃべくり 007（日本テレビ系列））
 - 『トーク型』（例：嵐にしゃがれ（日本テレビ系列））
 - 『トーク＋歌型』（例：1 番ソング SHOW 日本テレビ系列））
 - 『多種コーナー型』（例：ひみつの嵐ちゃん！（TBS 系列））
 - 『訪問型』（例：おじゃマップ（フジテレビ系列））
 - 『クイズ型』（例：ネプリーグ（フジテレビ系列））
 - 『番付、格付け型』（例：ロンドンハーツ（テレビ朝日系列））
 - 『スポーツ型』（例：VS 嵐（フジテレビ系列））
 - 『グルメ型』（例：火曜サプライズ（日本テレビ系列））
 - 『ドキュメンタリー型』（例：中居正広の金曜日のスマたちへ（TBS 系列））
 - 『お笑い型』（例：リンカーン（TBS 系列））
 - 『動物メイン型』（例：天才！志村どうぶつ園（日本テレビ系列））
 - 『雑学型』（例：雑学王（テレビ朝日系列））
 - 『感動型』（例：24 時間テレビ（日本テレビ系列））
- など、ほか多数。

ここからわかることは、主にジャニーズや AKB48 などのアイドルやお笑い芸人が出演する番組がバラエティ番組の主流であり、番組名にグループの名前や出演者（メイン MC）の名前が入っているものもあるということだ（例：VS 嵐、中居正広の金曜日のスマたちへ など）。

9. 番組分析

バラエティ番組は、各テレビ局がそれぞれ持っている。そこで、私たち若者から親の年代、祖父母の年代までもが一番テレビを観るのではないかと思われる、19時～22時台（いわゆる「ゴールデンタイム」）に放送されているバラエティ番組（今回は全国ネットで放送されているものに限る）について2月20日～3月18日までの1ヶ月間で調査、研究した。

調査方法：各番組を観て、構成、視聴率・視聴者の年齢層・種類（ファン・一般など）について分析した。（視聴率は、F-cast テレビドラマ視聴率参照。小数点第2位を四捨五入。）

『ひみつの嵐ちゃん!』（TBS系列 毎週木曜 22時～22時54分放送）

【構成】出演者：嵐ほか

内容：毎回2コーナー放送され、どちらのコーナーも嵐から二人登場する。コーナーによって出演ゲストは異なる。前半のコーナーは「V.I.P リムジン」という嵐の二人が観光バスをリムジンにたとえ、女性ゲストをもてなすというコーナー。ゲストの要望を事前にスタッフが調査し、その要望を嵐とゲストが行い、叶える。過去には、嵐男2人旅と題し、嵐メンバーがメンバーをもてなす特別編が放送された。素で楽しんでいる姿が垣間見られて、ファンにとって本当に嬉しく、観ていて楽しい内容となった。今後、この企画が行われるかは現段階では未定だが、望んでいるファンは多く、またこの企画に参加したメンバーからも「この旅は本当に楽しかった、また行きたい!」という声がある。後半のコーナーでは「ラストミッション」「オトナはできて当然 SHOW」「マネキンマストアイテム」などが放送される。どのコーナーも、嵐2人と芸人、俳優、モデルから3人が登場する。俳優の場合はたいてい番宣があり、芸人は基本男性が登場するが、時々女性が登場することもある。ラストミッションは、嵐2人と芸人3人の5人が指定された競技でガチンコ対決をし、最下位になった一人が罰としてミッションを行わなければならない。進行・実況はTBSアナウンサーが務め、見届け人として女性ゲストが3人いる。そして、このコーナーは番組観覧もある。オトナはできて当然 SHOW は、事前にスタッフが街に出て調査し、正解率をできた率と表し、その問題（5問）に嵐2人と芸人や俳優3人の5人で挑む。各問題一人ずつ代表となり、別室で回答する。他の4人はその間同じ問題を別室の映像を見ながら一緒に考える。代表者が間違えると、ひとり間違える毎にオトナ味のお茶（2倍）×間違えた人数のお茶を全員が最後に飲むことになる。マネキンマストアイテムは、決められたアイテム（例：シャツ）を用いてそれぞれがコーディネートし、自分自身がマネキンとなって着る。そして、女性ゲストにどの服装が良いか選んでもらうコーナー。マネキンとして参加するのは、嵐2人と芸人・俳優・モデル

などから3人の5人。最下位の方には、売れ残りシールが貼られ、次回参加するときには最初に着ているマントに貼られている。司会進行は、まずだおかだの岡田圭右と木下優樹菜が務める（調査当時）。（それ以前はオセロが務め、現在は岡田圭右とオセロの松嶋が務める。）

また、今回調査した放送の4回目は未公開SPであり、未公開SPは以前にも行なったことがあるが、以前はV.I.P リムジンがV.I. PR00Mというコーナーだったため、V.I.P リムジンとしては初めての試みである。

番組の流れ：番組開始すぐに約30秒程度でその日に放送する内容の予告が流れ、オープニングへに入る。アニメーション（10～20秒程度）があり、その後最初のコーナー（V.I.P リムジン）へに入る。前半のコーナーは平均24分28秒あり、後半のコーナーは平均22分13秒ある。そして、前半・後半どちらのコーナーもCMが入る。前半のCMは平均1分26秒（各回1回）、後半のCMは平均2分1秒（各回2～3回）ある。（未公開SPが4回目にあったため、その回は平均に含めていない。）また、後半のコーナーは毎回異なる。エンディングでは、次回予告とスタッフロール（エンドクレジット）が流れる（1分～1分30秒程度）。

この番組は番組観覧があり、FC（ファンクラブ）会員とテレビ局から各々募集をしている。

視聴率：平均視聴率（4回分）：10.4%

（2月23日10.2% 3月1日9.9% 8日11.8% 15日9.6%）

視聴者の年齢層：10代～50代と幅広い。（個人的に調査したため、明確ではない。）

視聴者の種類：周りでは、ファンの方は勿論だが、一般視聴者もいる。性別も男女関係なくいるが、ジャニーズの番組ということで女性が多い。

分析：この番組は、放送開始からかなりリニューアルを重ねている。一番初めは『社会科ナゾ解明TV ひみつのアラシちゃん!』（2008年4月～5月末）、『ひみつのアラシちゃん!』（2008年6月～2009年5月下旬）、現在の『ひみつの嵐ちゃん!』（2009年5月末～現在）と番組名だけでも2回変更されており、コーナーも大幅に変更されている。

ファンの中でも、「嵐は5人で嵐だから」や「5人で仲良しな画が見たい」という思いで、嵐のメンバーが2人ずつ登場することをあまり良いと思わない方もいるが、唯一嵐メンバーが2人ずつ登場し、ロケを行なう番組という点で楽しみにしている方もいる。また、半年に一度の間隔で「マネキンファイブ特別篇」という嵐5人がテーマ（デート服）を決め、一般女性に投票してもらい、順位を付けるという企画がある。その企画のときは、視聴率が特に高くなる。普段の視聴率は、嵐のレギュラー番組の中で最も低く、ときには10%を切ることもあり、深夜番組並みの視聴率を取ることも。（上記、視聴率参照。）観覧募集はあるものの、最近では観覧客を入れない

コーナーも多くある。そして、来年（2013年）3月で番組が終了になることが12月18日付で発表された。

『嵐にしやがれ』（日本テレビ系列 毎週土曜 22時～22時54分放送）

【構成】出演者：嵐、岩本規夫（ナレーション）ほか

内容：嵐メンバーはゲストを知らされないまま収録に臨む。この番組では、ゲストは「アニキゲスト」ということで男性のみ（過去に、マツコ・デラックスやミッツ・マングローブなどの女装タレントの出演はあったが女性は無い）。1時間で1コーナー、もしくは2コーナーの放送で、アニキゲストと噂話やアニキから三カ条の極意を学んだり、芸人たちと料理で対決したり、様々な鉄人にそれぞれの極意を学んだりする。料理対決は勝敗を決める保安官（料理人）が指定した料理を5工程で作るように設定されており、嵐5人対芸人5人が各々1工程ずつ行なう。また、即興で何かをやるといふことが多い番組である。

番組の流れ：番組開始時刻と同時にその日の放送分の予告（見どころみたいなもの）を放送する。CM明け、嵐が登場しコーナーが始まる。アニキゲスト登場の回であれば、オープニングでアニキゲストを予想してから招き入れる。料理対決であれば、嵐の登場後すぐに相手チームと進行を務める日本テレビアナウンサーが登場し、最後に審査をする保安官が登場する。また、時間配分は次のとおりである。料理対決の場合、オープニングは8分30秒～9分、各工程は4分～7分であり5工程すべてで約30分～32分、試食・判定で8分程度ある。通常のアニキゲストの回は、オープニングは7分～7分30秒、噂話・三カ条の極意で35分～36分30秒程度ある。その間、CMが数回入る（1回につき平均2分13秒）。エンディングは、どの回もCM明け後、次回予告と共にスタッフロールが流れる（1分～1分30秒程度）。

また、この番組は番組観覧があり、FC会員と観覧会社から各々募集をしている。

視聴率：平均視聴率（4回分）：13.7%

（2月25日13.9% 3月3日10.7% 10日16.7% 17日13.7%）

視聴者の年齢層：10代～50代と幅広い。（個人的に調査したため、明確ではない。）

視聴者の種類：周りでは、ファンの方は勿論だが、一般視聴者もいる。性別も男女関係なくいるが、ジャニーズの番組ということで女性が多い。

分析：荒野の十人はファン向けというよりは一般向けの感じだが、普段見ることのできない嵐のメンバーが料理をしている姿が見られるのは良い。だが、各工程の作業中に芸人の情報を暴露し、一見芸人を動揺させているように見えるがその分芸人が目立つため、嵐の映る時間が短い。放送

後、作った料理のレシピがホームページ上に上がるので、そのレシピを入手して視聴者自身が後で作ることができるように工夫されている。

また、アニキゲストでジャニーズ事務所の先輩や同期（まれに後輩も）が登場すると、1時間丸々事務所関係の話や昔話になることが多く、ファン寄りの内容となり嵐以外のジャニーズファンの方も観るため、視聴率が高くなる。（上記、視聴率参照。3月10日に同事務所の生田斗真が出演。）過去には、少年隊の東山紀之、TOKIOの城島茂や山口達也、松岡昌宏、関ジャニ∞、KAT-TUNの亀梨和也が登場。嵐と同じ事務所の先輩後輩が最も多く登場する番組でもある。

『VS 嵐』（フジテレビ系列 毎週木曜 19時～19時56分放送）

【構成】出演者：嵐、フジテレビアナウンサー（天の声）ほか

内容：嵐とゲストチームが5つのゲーム（アトラクション）で対戦する。嵐チームには、プラスワングスト（芸人（コンビ）や歌手、モデルなど）がつく。歌手やモデル、俳優の場合は、大半何かの宣伝があつての登場の場合が多い。また、スペシャルの時はプラスワングストが入れ替わり立ち替わりで2～3組登場することもある。

番組の流れ：タイトルコールの後、オープニングが2分30秒～3分30秒程度あり、開始40秒後半～1分位でゲストチームが登場し、1分50秒～2分30秒位でプラスワングストが登場する。

番組開始、3分～3分30秒程度でゲームに入る。各ゲームの時間配分は、大体次のとおりである。1ゲーム目は11分～12分、2ゲーム目は6分～8分30秒、3ゲーム目は6分～7分30秒、4ゲーム目は8分～12分30秒、最終ゲームは10分30秒～14分40秒程度となる。また、3ゲーム目～最終ゲーム、エンディングの間には数回CM（1回につき平均2分22秒）が入る。

各ゲーム、始める前・中間（先攻チームのゲーム終了時）・終了後それぞれトークが入る。プレーのする順番やコンディション、ゲームしてみたの感想などを天の声も交えて話す。

また、ゲーム中は天の声が実況を務めるものが多くあり、制限時間のあるものが多い。

エンディングは、最終ゲーム終了後、そのままの流れで進んでいくことが多い。そして、嵐チームが勝つと10秒チャレンジ、負けるとMDA（モースト ダメ アラシ）のコーナーへと続く。10秒チャレンジは、スタッフや最近では一般視聴者の考えたゲーム案を嵐の5人が10秒間で挑戦するコーナー。MDAは、嵐のメンバーがそれぞれのカラー（いわゆるメンバーカラー）の箱の上上がり、嵐の中でその回で一番成績の悪い人（チームの足を引っ張った人）をメンバー自身がゲーム内容を全員で振り返りながら選び、選ばれた人が罰ゲームを受ける。その罰ゲームとは、受けるメンバーの乗っている台が開き、真っ逆さまに落下するというもの。下にはスポンジが敷き

詰められているため、怪我をすることはない。

また、3月8日にはVS嵐初の試みである、好プレーダメプレー集を放送した。好プレーは嵐メンバーが自分自身で選択し、ナレーションも行なった。ダメプレーはスタッフが選択し、ナレーションは天の声を務めるフジテレビアナウンサーが行い、VTRを観ながらメンバーたちで良いところや悪いところなど振り返った。そして、最もダメだった人MMDA（モースト モースト ダメ アラシ）を決める。MMDAはMDAをパワーアップさせ、墨汁を染み込ませたスポンジの所に落下するようになっている。アイドルが受けるとは思えない罰ゲームだ。

そして、この番組は番組観覧があり、FC会員やテレビ局、観覧会社から各々募集をしている。
視聴率：平均視聴率（3回分）：12.2%

（2月23日11.5% 3月1日12.6% 8日12.4% 15日放送なし）

視聴者の年齢層：10代～50代と幅広い。（個人的に調査したため、明確ではない。）

視聴者の種類：周りでは、ファンの方は勿論だが、一般視聴者もいる。性別も男女関係なくいるが、ジャニーズの番組ということで女性が多い。

分析：嵐の番組で、唯一の対戦型アトラクションゲームの番組。2008年～2009年9月までは関東ローカルの30分番組であった。2009年10月より、現在の時間帯で放送される。

ゲストチームは、ドラマチーム（番組宣伝をかねて）からお笑い芸人チームと幅広く、プラスワンゲストは男性お笑い芸人（コンビ）が多いが、女性の方も登場するときがある。そして、嵐メンバーがドラマや映画などの番組宣伝のため、ゲストチームとして登場することもある。だが、相葉雅紀だけはまだ一度もゲストチームでの登場がない。また、ここ2年くらいだが嵐チームにはレギュラーハンデが付くようになり、ゲストチームはノーマルタイプで対戦するが、嵐チームは難易度が高くなっている。（女性ゲストがゲームに参加する場合は、両チームに女性ハンデというものが登場する。）ゲームは、毎回5ゲームで争われる。そして、3月29日に放送されたVS嵐SPでは、嵐が7ヵ月という長い時間をかけて構想を考えた新ゲームが登場した。

『ザ!鉄腕!DASH!!』（日本テレビ系列 毎週日曜19時～19時56分放送）

【構成】出演者：TOKIO、平野義和（ナレーション）ほか

内容：「鉄腕!DASH!!」という深夜番組を経て、1998年より放送される。

通常の放送では、前半・後半の2コーナー構成で、前半は自然に関するテーマのコーナー、後半は主に実験的内容のコーナーで構成される。前半のコーナーは「DASH村」（2011年3月11日の東日本大震災で、村の場所が福島県浪江町の津島地区にあると視聴者に判明）や「DASH海岸」

(東京湾のある横浜市が管理している入り江の一画を借りてウナギやアイナメなどがその一帯に住み着くかどうかという調査を行なうコーナー)があり、後半は「雪玉転がしてどこまで大きくできるか!？」や「DASH ガレージ」(研究した回では、メガ棒菓子は作れるのか?に挑んだ。)など、身体を張ったり、巨大なものを制作するなど大掛かりな実験を行なう。(実験の内容は毎回異なる。)

また、震災から一年の2012年3月11日には、TOKIOの5人が福島県川俣町より2時間生放送で出演。震災当時～現在までのDASH村の映像や、DASH村での放射能の測定の様子、チェルノブイリやDASH村でお世話になった方々のもとにTOKIOのメンバーが訪れ、現在の様子など話を伺うコーナーもあった。

番組の流れ：番組開始すぐに前半のコーナーが始まる。開始1分くらいでオープニングのアニメーション(タイトル)が流れる。コーナーの長さは、前半は平均24分12秒、後半は平均24分2秒である。(今回の調査では、3回目の放送が2時間SP、4回目は放送が無かったため、2回分で計算されている。)そして、各コーナーCMが数回(1回につき平均2分25秒)入る。また、両コーナー必ずナレーションが入る。エンディングは、次回予告とスタッフロール(1分～1分30秒程度)が流れる。

視聴率：平均視聴率(3回分)：13.9%

(2月26日14.9% 3月4日13.1% 11日13.6% 18日放送なし)

視聴者の年齢層：10代～50代と幅広い。(個人的に調査したため、明確ではない。)

視聴者の種類：周りでは、ファンの方は勿論だが、一般視聴者もいる。性別も男女関係なくいるが、ジャニーズの番組ということで女性が多い。

分析：前半のコーナー・後半のコーナー共に、TOKIOメンバー2人体制。そこに専門家や指導者、タレントなどが加わる。この番組は、前半・後半どちらのコーナーもロケに出ていることが多く、スタジオでの収録が少ないため、観覧募集を行っていない。ロケに出ている分、専門家たちのほかにわれわれ一般人との関わりも多くあり、TOKIOのメンバーに親近感が湧く方も多くいるだろう。日曜日の家族団欒で過ごしている時間帯に放送されるには適している番組である。

ここからわかることは、今回調査した4番組はどれもジャニーズの番組(そのうち、3つは嵐の番組)であり、また19時台と22時台の番組であること。

視聴率を時間帯別でみると、ゴールデンタイムでも、19時台と22時台を比較すると、19時台の番組はどちらも平均で12%を超えている。それは、19時台にテレビを囲んで見ている家族が多

いからではないかと思う。また、22 時台の番組は平均 10%前後である。これは、曜日や裏番組などにより異なりが生じるのではないかと思う。平日であれば子ども（小・中学生以下）は早く寝たり、大人は夜遅くまで仕事があったりする。祝前日や土日であれば、夜中まで夜ふかしをする人も多くいるだろう。そのため、一概にはいえないが、22 時台は 19 時台に比べると視聴率が低い傾向にあると思われる。

そして、嵐の番組は観覧客（特にファン）を入れて周りからも盛り上げ、常に歓声や反響を受けながら番組を制作している傾向にあり、TOKIO の番組（今回調査した『ザ!鉄腕!DASH!!』に関して）は、その地域の方々やその企画に携わった方々との交流を持つことが可能な番組に制作されている。また、観覧客の大半が女性であることは、ジャニーズのグループを好きな人は女性が多いためであるからだろう。

10. むすびに：研究成果（私の主張）

バラエティ番組の歴史は、1950 年代に番組形態が作られ、1960 年代、80 年代に一番繁栄した。現在有名な大御所と呼ばれるお笑い芸人（例：60 年代ではザ・ドリフターズ、80 年代では明石家さんま）はみなこの時代に新人若手お笑い芸人としてお笑いの道に進み、活躍していた。その中でも、放送開始から現在にわたって続いている長寿番組と呼ばれるものは『笑点』（日本テレビ）と『笑っていいとも!』（フジテレビ）だ。この 2 番組はそれぞれターゲットが定められており、そのターゲットが番組を見続けるため、視聴率が安定していると思われる。

また、『THE MANZAI』のような、新チャンピオンが生まれ、お笑いの世界に新たな風を吹き込む番組もある。そして、この番組の主な視聴者は若い世代であった。若い世代は、現在もテレビ離れが進んでいると言われている。周囲の同世代に話を聞き、テレビを見ない人、自分の気になる番組だけを 1~2 時間程度見る人が多く感じられた。その要因として、現在は Twitter や Facebook など SNS サイトやインターネットが日々の生活に強く結びつき、テレビは「ながらで見えるメディア」となったことが挙げられるだろう。また、「見たい番組が無い」という声もあった。それは何故か、今後の課題でもある。

現在、数多くのバラエティ番組があるが、出演者はほぼ同じメンバーで決まっている。それを表している代表格がマツコ・デラックスである。マツコ・デラックスは現在、レギュラー番組だけで 6 本のバラエティ番組に出演している。何故、多数の番組に起用されたのか？その理由として、オネエで毒舌なキャラクターが現在の時代にマッチングしていることが挙げられるだろう。そして、視聴者が抱いている想い、疑問をぶつけている姿に親近感が沸くのではないだろうか。

最後に、今後の課題として、バラエティ番組の歴史がまだまだ浅いと思うので、もう少し深く掘り下げ、現在放送されている番組で同時刻や他の時間帯に放送されるバラエティ番組の研究を続け、最終的には各テレビ局のバラエティ番組の傾向を出していきたいと思う。

そして、視聴率の高い番組と低い番組ではどのような傾向が見られるのか調査をし、今のバラエティ番組に必要なもの、今後のバラエティ番組はどうあるべきのかなど、自分なりの考えを示したいと思う。

【注】

- (1) 佐藤義和 (2012) 『バラエティ番組がなくなる日』 33-44 頁、49-52 頁
- (2) 佐藤義和 (2012) 『バラエティ番組がなくなる日』 53-62 頁
- (3) 佐藤義和 (2012) 『バラエティ番組がなくなる日』 62-82 頁
- (4) 佐藤義和 (2012) 『バラエティ番組がなくなる日』 82-86 頁
- (5) 佐藤義和 (2012) 『バラエティ番組がなくなる日』 87-88 頁
- (6) 佐藤義和 (2012) 『バラエティ番組がなくなる日』 92-96 頁

【参考文献・資料】

<文献>

佐藤義和 (2011) 『バラエティ番組がなくなる日』 主婦の友社

<Web ページ>

『F-cast テレビドラマ視聴率』 <http://tv8ch.blog98.fc2.com/>

『バラエティ番組』 (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%83%A9%E3%82%A8%E3%83%86%E3%82%A3%E7%95%AA%E7%B5%84>

『メディアミックス』 (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%83%9F%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9/>

『冗談画報』 (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%97%E8%AB%87%E7%94%BB%E5%A0%B1>

『ザ・ベストテン』 (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B6%E3%83%BB%E3%83%99%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%86%E3%83%B3>

『夜のヒットスタジオ』 (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9C%E3%81%AE%E3%83%92%E3%83%83%E3%83%88%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%82%B8%E3%82%AA>

『はっぱ隊』 (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%AF%E3%81%A3%E3%81%B1%E9%9A%8A>

『ノブナガ』（Wikipedia）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%96%E3%83%8A%E3%82%AC>

<映像>

『ひみつの嵐ちゃん』（TBS系列 毎週木曜日 22時～22時54分放送）

『嵐にしやがれ』（日本テレビ系列 毎週土曜日 22時～22時54分放送）

『VS嵐』（フジテレビ系列 毎週木曜日 19時～19時56分放送）

『ザ!鉄腕!DASH!!』（日本テレビ系列 毎週日曜日 19時～19時56分放送）